

# まちの話題

## 登山客の安全祈願・八子高原夏山開き

夏の登山や林間学校など本格的な夏山観光シーズンを前にした5月1日、八子高原夏山開きが八子高原交流促進センターで行われました。

集まった約50人の関係者らは、神事で夏山の安全と多くの観光客が訪れることを祈願した後、テープカットとくす玉割りで夏山開きを祝いました。氷ノ山鉢伏観光協会の一ノ本達己会長は「八子高原はもろろん、市内の観光スポットに大勢の人に立ち寄ってもらえるように取り組んでいきたい」と話しました。



テープカットとくす玉わりで夏山開きを祝う関係者ら

また、この日は養父市のキャラクターの公募に入选した人たちの表彰式も合わせて行われ、やっぴーを考案した霜下幸世さん（養父市上箇）は「採用は思ってもいなかったですが、子どもたちに人気のようですね」と笑顔で話してくれました。

## 坑道でうまくなくれ

### 純米吟醸酒「仙櫻」を蔵入れ

養父市産の有機米を使った純米吟醸酒「仙櫻」の新酒が5月12日、明延鉱山探検坑道内（大屋町明延）の「明寿蔵」に蔵入れされました。仙櫻は、大屋町で作られた有機米「兵庫北錦」と氷ノ山の湧き水「ぶなのしずく」を原料に使い、養父市と山陽盃酒造（六栗市）が平成9年から製造をしているものです。

この日、関係者ら約30人が坑道内に集まり新酒の完成と順調な熟成を祈念しました。

同社の壺阪興一郎社長は「味と香りを進化させようと、新しい酵母を使いました。女性にも楽しんでもらえるような味になるでしょう」と話しました。

年間を通じて常温12度ほどの蔵の中で10月下旬まで熟成され、まるやかさを増したお酒は、市内の酒店などで販売されます。



新酒を蔵に納める壺阪社長(左)と藤岡副市長(左)

## 大きくなってね！アユの稚魚を放流

アユ漁の解禁を控え、八鹿町八鹿の八木川で5月10日、八鹿幼稚園の園児約40人がアユの稚魚を放流しました。

この事業は、円山川漁業協同組合が放流を通して川の生き物や自然に親しんでもらおうと市内の小学校や幼稚園などを対象に放流体験の事業として行っています。

この日放流したのは、高知県で養殖された体長12～13センチの稚魚です。園児たちは、バケツに小分けされた稚魚を興味深そうに覗き込んだり、手でつかんだりしながら川へと放流し、

元気に泳ぎ回る稚魚を見て「泳ぐのが早い」「元気に育ってね」などと楽しそうに話していました。



「大きくなってね」と声を掛けながら稚魚を放流し、

## 新商品は100%地元産で 新商品の米酢開発へ稲作スタート

4月25日、大屋町筏で酢などの調味料を生産する「但馬醸造」が地元産の米を使った米酢の開発に向けて、地元の田んぼで米の生産をスタートさせました。

これは、同社にこれまで地元の原材料を使った製品がなかったため、地元農家と連携をして、付加価値のある商品づくりを目指して取り組んでいるものです。

この日、25アールの田んぼには、収穫量が多いという「ふくひびき」の苗が同社員らの手で植え付けられました。新商品の米酢が完成するのは来年の春で、同社の社長、田崎雅一さんは「地元産の商品として大々的にPRし、地元農家の人たちが養父市の産業の活性化の力になれば」と新商品への思いを話していました。



貫頭衣を着て田植えをする児童たち

### 小佐小学校・赤米づくり

日本の米の原種とされる赤米づくりに取り組んでいる小佐小学校の児童25人が5月25日、学校近くの田んぼで赤米の田植えを行いました。

古代の服「貫頭衣」を着た児童たちは、バランスを崩して泥だらけになりながら、農家の人の指導で苗を一本ずつ丁寧に植えていきました。

今年植えられた苗は今年の秋まで、児童たちが「かかし」づくりや田んぼの世話を行っていきます。収穫された赤米は、来春の平城遷都祭に献上します。

参加した児童は「たくさん収穫できるよう頑張つて世話をしたいです」と抱負を話してくれました。



田植えをする但馬醸造の社員ら

## 拝啓 市民の皆様

宮崎県では、国内では10年ぶりといわれる口蹄疫が猛威を振るっています。人に感染することはありませんが、牛や豚に感染すると、食欲不振、歩行困難などの症状が現れ、幼畜の場合致死率が50%に達するといわれます。日本では家畜伝染病予防法において法定伝染病に指定されており、感染が疑われる段階からその地域の家畜の移動などが制限され、感染が確認されたら、同居する家畜も含め速やかに処分することが義務付けられています。

但馬地方は世界のブランドである但馬牛を産する地域であり、本市では地域ブランドである八鹿豚も生産しています。口蹄疫が兵庫県あるいは但馬で発症することになれば、畜産業をはじめ地域の経済は計り知れないほどの痛手を被りますし、優秀な但馬牛を後世に残すことさえ危うくなります。

宮崎県で被害が拡大した原因は、感染を察知してから対策までの間に遅れが生じたことにあるといわれています。本市では、同県で発症が報じられた後、すぐに畜産農家に対し感染予防の注意を呼びかけるとともに、県やJA、関係各機関、畜産農家と連絡協議会を設け、消毒薬を配布するなど防疫対策に万全を期しています。

6月3日午後2時頃、突然の雷とともに親指大の雹が八鹿地区を襲いました。また、同時刻、大坪地区では局地的な豪雨に見舞われ、時間雨量が養父市における過去最高の80ミリを記録しました。災害は忘れたころにやってくるというのは過去の話し。

これからは、日々、予測を超える各種災害等に対して備え、市民とともに行う安全・安心のまちづくりを図っていかねばならないと思われました。

市長 広瀬 栄